「相中相高百年史」より

（ 戦時体制下の相馬中学校　１５）

１０　学徒動員：三年生（ 相中第４５・４６期生等 ）・・・ペンをハンマーに

《 横浜・海軍航空技術廠支廠へ出動 》

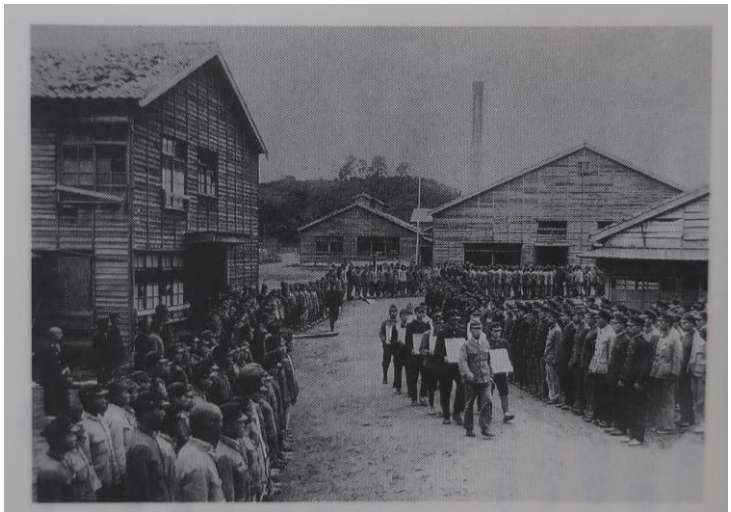
（５）学友、黄泉（こうせん）の客（かく）となる（その２）

「「了」だけが　何故とくずれる母なかに　部屋の我等も涙で座る」　　菅野治郎 (※1)

菊地了のお袋さんが、遺骨を引取りにきた日の心境を詠んだのだった。

「友二人　爆死の報に粛として　声もなきまま眼（まなこ）閉じたり」　　大野博伸

時間は少しさかのぼるが、この頃**佐藤光威** (※2) は工場が忙しくさらに工員が召集され人員も少なくなり、日曜出勤して音波断流機の取り付け作業をしていた。その最中に突然台が倒れた。



級友に見送られ、故郷に帰る菊地・南原君らの遺骨

膝をグサリ。どんどん腫れ上がって来る。急いで医務室に行ったが、内出血中でどうにも手の施しようがない。その晩は痛みで眠れずじっと耐えた。翌日医務室で血を抜いてもらったら少しは楽になった。診察の結果は「膝皿蓋亀裂骨折」と診断され、ギブスをつけられて追浜病院にしばらく入院することになった。

退院後、佐藤は帰郷を許されて家に帰ることになった。

帰郷のため夜中に寮を出発しようとしたとき、偶然親友の南原がトイレに起きてきた。

南原とは、小学一年から　中学まで、いつも一緒のクラスで過ごしてきた仲で、親友中の親友だった。

「お前、家に帰るのか」

「うん、帰る。家に用事ないか」

「何もないな。気をつけて行ってこいよ」

「うん……」

これが南原との最後の会話になろうとは知る由もなかった。

帰郷して家で寝ていると、ある晩、二階を高下駄で歩く奴がいる。

「ガラガラッ……」

「うるさい！」と言おうとした瞬間目がさめた。何事もない。

「夢か？」と思いまた眠りに就いた。すると今度は

「チタッ、チタッ……」と何か滴り落ちるような音がする。

「血だ！」と思った。ランプをつけて見たが何もない。

とてもいやな夜で、うなされながら眠りについた。

次の日、鹿島町役場に勤めていた父が帰ってきて、ポツリと言った。

「南原君が死んだそうだ」

「えっ……」

びっくりして、声もでなかった。

爆弾にやられたときの両君の気持ちは、どんなだったろうか。悔しい気持ち、悲しい気持ち、あれこれ考えると、筆者(※3)はいつも胸の張り裂けるような思いにかられる。

卒業後菊地　了(※4)・南原文夫(※5)両君の霊を慰めるべく、相馬中学45・46回（卒業は2回に分かれた）の同級生が一堂に会し、三十三回忌の法要をやり、また1994（平6）年に五十回忌の法要も盛大に行った。時には墓参りにも行った。霊前にある彼等の写真を見ると、いつも十五才のまだあどけない表情のままだ。何かを言いたいのだろうが、ただ黙って、優しい顔で我々を見ているだけ。それが無性に悲しい。

「どうぞ、成仏してください」

「どうぞ、安らかに眠ってください」

とひたすら祈らずにはいられないのである。

※三十三回忌法要

昭和52年11月20日 相馬郡鹿島町　勝縁寺において法要　導師　湯沢義亮(※6)

出席者　南原家・菊地家の遺族代表

恩師　　服部政一、栃本正倫、黒沢保、阿部忠久、阿部勝郎の諸先生

馬城会鹿島支部長　加藤義見氏

同級生　　70余名出席

※五十回忌法要

平成6年8月19日　原町市　ロイヤルホテル丸屋において祭事　　神官　桃井可生(※7)

出席者　菊地武志様　南原成人 様

恩師　　岩崎敏夫先生　　相馬高校馬城会長　橋本正一 様　　相馬高等学校長　荒 重富茂 様

同級生　　64名出席

※平成8年追悼法要式

平成8年8月24日 相馬郡鹿島町　勝縁寺において法要　　導師　湯沢義亮

出席者　鹿島町長　中野一徳 様　　馬城会鹿島支部長　今野武義 様

同級生　　約50名出席

(※1）中第46回　昭和22年卒　新地出身

(※2）中第45回　昭和21年卒　真野出身

(※3）熊耳　敏　中第46回　昭和22年卒　大甕出身

(※4）中第46回　昭和22年卒として馬城会会員名簿に掲載　新地出身

(※5）中第46回　昭和22年卒として馬城会会員名簿に掲載　上真野出身

(※6）中第45回　昭和21年卒　鹿島出身

(※7）中第45回　昭和21年卒　大野出身

（出身地は馬城会会員名簿による　選択転記　村山）